

「チーム学校」を理解するために 実践編 公開について

この教材『「チーム学校」を理解するために 実践編』は2022年度製作の『「チーム学校」を理解するために 基礎編』の続編として、2023年度のスクールリーダー向けオンデマンド公開講座用に作成しました。そのため個人ワークが入っています。

公開講座終了後は校内研修用教材として使用できるように①動画3本(合計約40分)と、②受講資料(模擬事例情報・ワークシート)、および校内研修進行もしくは受講復習用に③動画の解説文(ノート原稿)とを、基礎編同様に教職キャリアセンターのホームページにアップしています。あらかじめご準備の上視聴を始めてください。

校内研修で使用する場合は、あらかじめ参加者でグループを作り、個人ワーク部分をグループワークで行うと、よりケース会議の実践に近い形で受講できます。

ワークの部分は動画がありません(動画②と③の間にワークを行います)。

では次のスライドから、音声入りの1番目の動画が始まります。

「チーム学校」を理解するために 実践編 その① 概要編

—校内での連携と生徒支援を考える—

愛知教育大学 教職キャリアセンター教育支援専門職研究部門 制作

安藤久美子(心理講座) 岩山絵理(福祉講座) 成毛理子(教職大学院) 杉原里子(スクールソーシャルワーカー)

2023

「チーム学校」を理解するために 実践編 その① 概要編 —校内での
連携と生と支援を考える— 愛知教育大学

本教材は、生徒指導提要に基づいて解説をしています。生徒指導提要本文を
ダウンロードし、ご参照いただきますと、より理解が深まります。

文部科学省「生徒指導提要」

https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf

本教材の構成

・ この教材は3本の視聴教材から構成されています。

①概要編(約10分)

改正生徒指導提要(2022)の解説をふまえて、本教材のねらいを説明します。

②模擬事例編(約20分)

模擬事例の検討を行います。模擬事例の情報から、個別ワークを行います。

ワークシート1はアセスメント演習、ワークシート2は支援策の策定演習です。

③解説編(約10分)

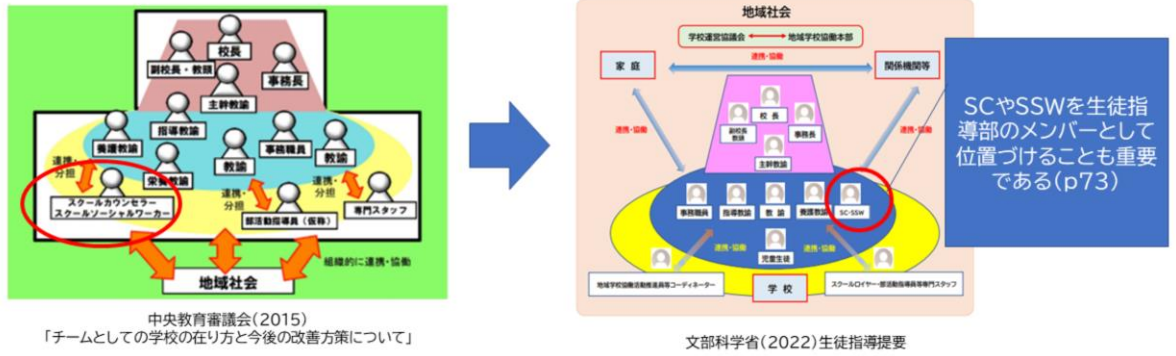
アセスメントの例、支援策の例を示しながら解説します。

本教材は3本の視聴教材から構成されています。

1つめは概要編、2つめは模擬事例編、3つめが解説編となっています。
順番にご視聴ください。

はじめに

- 2022年度スクールリーダー研修公開講座
「チーム学校を理解するために一困難を抱える子どもたちの支援についてー(基礎編)」
※教職キャリアセンターのホームページ(教育支援研究部門)から視聴できます。
- 2023年度スクールリーダー研修公開講座
「チーム学校を理解するために一校内での連携と生徒支援を考えるー(実践編)」
「令和4年12月生徒指導提要の改定」を踏まえたチーム支援のプロセスについて学びます。

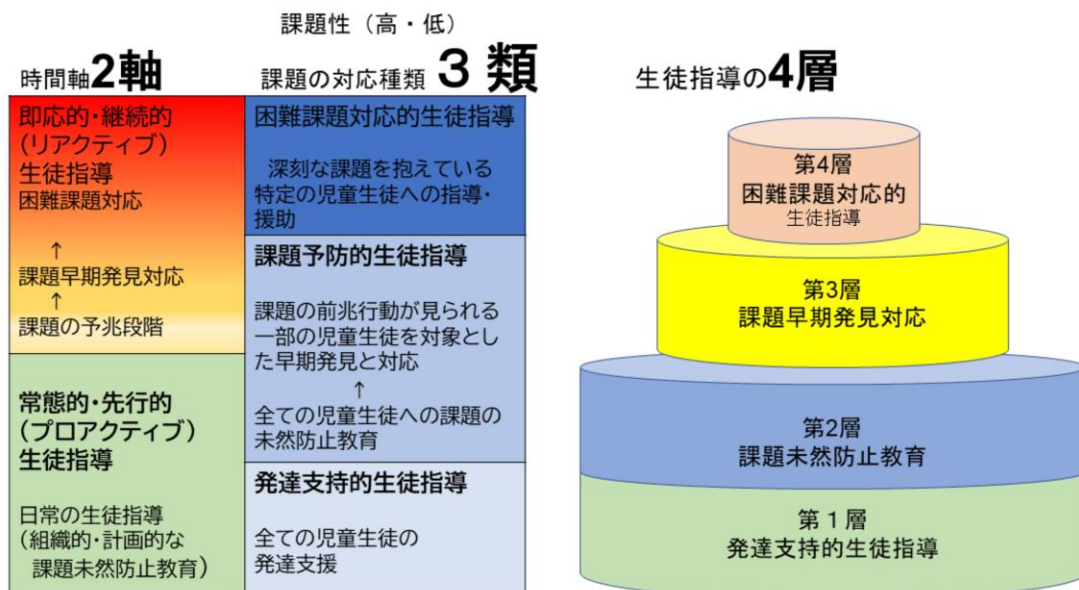


2022年度の公開講座では、『「チーム学校」を理解するために一困難を抱える子どもたちの支援についてー基礎編』をテーマに配信いたしました。今年度は、「チーム学校を理解するために一校内での連携と生徒支援を考えるー(実践編)」をテーマに本講座を作成しております。

この実践編においては、文部科学省が2022年度に出した生徒指導提要に基づいて説明をしていきます。専門職の位置づけやチーム支援のプロセスについても具体的に示されていますので、簡単に説明をしてから実践編の模擬事例へと進んでいきたいと思えます。

生徒指導提要では、「スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを生徒指導部のメンバーとして位置づけることも重要である」と示されています。

生徒指導の分類(2軸3類4層構造)



文部科学省(2022)「生徒指導提要」p17-23より安藤作成

生徒指導は、児童生徒の課題への対応を時間軸や対象、課題性の高低という観点から分類することで、構造化することができるとされています。

時間軸に着目すると、課題が見える前から日常的・先行的に行う生徒指導と、課題の予兆が見え始めた生徒や困難な状況に陥っている生徒を対象として即応的・継続的に行う生徒指導の2軸になります。

課題性の高低に着目すると、全ての児童生徒を対象とする、発達支持的生徒指導と予防的な支援が求められる課題予防的生徒指導、深刻な課題を抱える生徒を対象とする困難課題対応的生徒指導の3類になります。

対象となる児童生徒の範囲に着目すると、全ての児童生徒を対象とする第1層の発達支持的生徒指導、第2層の課題未然防止教育、課題の前兆行動が見られる一部の生徒を対象とする第3層の課題早期発見対応、困難な状況にある特定の児童生徒を対象とする第4層困難課題対応的生徒指導の4層に分類されます。

この実践編では、課題の予兆段階であり、予防的支援が必要とされる課題予防的生徒指導のうち前兆行動が見られる一部の児童生徒を対象とする第3層課題早期発見対応層に含まれるケースを扱います。

チーム支援の形態とプロセス (p88~96)

今回は「校内連携型支援チーム」による支援のプロセス ②③ を学びます (p89~90)

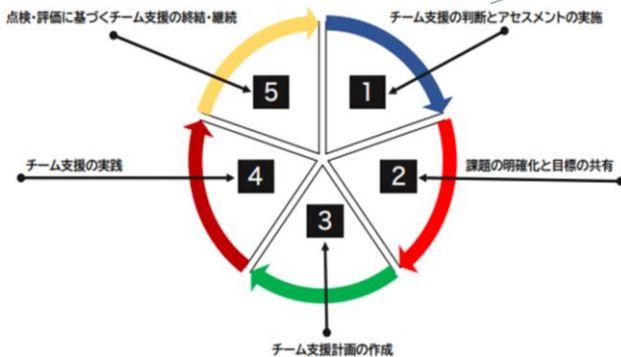


図5 チーム支援のプロセス
(困難課題対応的生徒指導及び課題早期発見対応の場合)

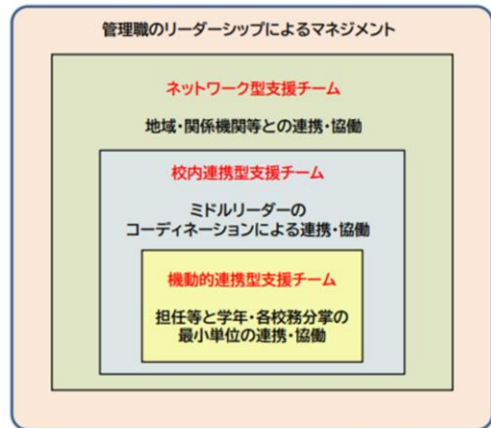


図6 支援チームの形態

文部科学省(2022)「生徒指導提要」p92

生徒指導提要では、生徒指導と教育相談の連携を核に、多職種との協働も視野に入れた包括的な支援をチームとして展開するプロセスが示されています。チーム支援のプロセスは先に紹介した4層構造に応じて2つのパターンが示されています。

今回の事例では第3層を扱いますので、第3層の課題早期発見対応を含むプロセスとして示される(生徒指導提要p90の)図5を用いて説明します。

プロセス1はチーム支援の判断とアセスメントの実施です。児童生徒の課題解決に向けて、子どもの理解を深めるために、関係する教職員やSCやSSWが参加するケース会議を開催します。

プロセス2の課題の明確化と目標の共有では、課題を明確化し、具体的な目標(方針)を共有した上で、それぞれの専門性や持ち味を生かした役割分担を行います。

プロセス3のチーム支援計画の作成では、アセスメントに基づいて、問題解決のための具体的なチームによる指導・援助の計画を作成します。

プロセス4ではチーム支援計画に基づいて、チームによる指導・援助を組織的に実施します。実施する際の留意点としては、定期的なチームによるケ

一ス会議の開催、関係者間の情報共有と記録保持、管理者への報告・連絡・相談が挙げられています。

プロセス5では、チーム支援計画で設定した長期的、短期的な目標の達成状況について学期末や学年末に総括的評価を行います。目標が達成した場合、支援は終結となります。達成していない場合は改めてアセスメントを行い、計画の見直しをしたうえで実施していくことになります。

「チーム支援計画」を作成し、支援目標を達成するために支援チームを編成しますが、支援チームには、3つの種類があると示されています。

1つ目は、担任等と学年、各校務分掌の最小単位の連携・協働を行う機動的連携型支援チームです。

2つ目はミドルリーダーのコーディネーションによるSCやSSWも加えて早期発見対応を行う校内連携型支援チームです。ミドルリーダーとは、各学校の組織によって変わりますが、教務主任、校務主任、特別支援教育コーディネーター、保健主事、生徒指導主事、学年主任、養護教諭等が考えられます。対応すべき課題によって中心になる人物は変わってきます。

3つ目は、地域・関係機関等を含むネットワーク型支援チームです。今回の模擬事例は、校内連携型支援チームにおける支援を想定し、支援のプロセス1~3の流れを学習できるように設定しています。

改訂 生徒指導提要(令和4年12月)

「生徒指導において発達を支える」とは^(p13)

- 児童生徒の心理面(自身・自己肯定感等)
- 学習面(興味・関心・学習意欲等)
- 社会面(人間関係・集団適応等)
- 進路面(進路意識・将来展望等)
- 健康面(生活習慣・メンタルヘルス等)

これらの
発達を含む
包括的なもの
↓
児童生徒の「自己
指導能力」の獲得

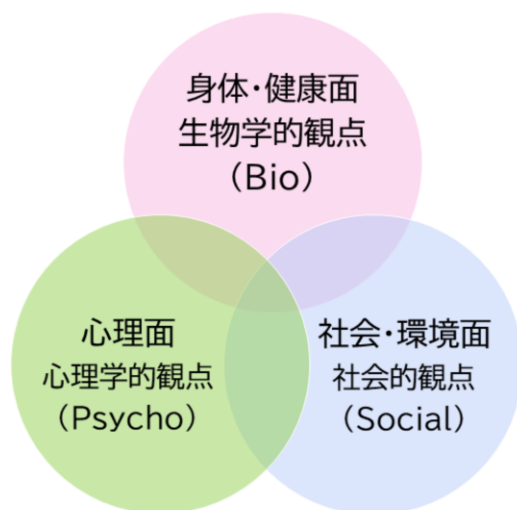
生徒指導の基本と言えるのは、教職員の児童生徒理解です。児童生徒の理解を深めるためには、多面的な視点からとらえたアセスメントが重要となります。

生徒指導提要において発達を支えるとは、児童生徒の心理面の発達のみならず、児童生徒の学習面、社会面、進路面、健康面の発達を含む包括的なものであると説明されています。

包括的なアセスメントを行うためには、関わる教職員がチームで行うことが有効です。アセスメントには、多種多様な方法がありますが、生徒指導提要においては、心理分野・精神医療分野・福祉分野等で活用されている生物・心理・社会の観点に着目するBPSモデルが一つの方法として紹介されています。

アセスメント の視点

BPSモデル(p91)
生物・心理・社会モデル
(Bio-Psycho-Social Model)



単独の専門職でアセスメントを行うことは難しい。多職種が連携してアセスメントすることが有効
BPSの3つの観点から検討し実態を把握し、多様さと複雑さを理解することが大切→支援資源へ

BPSモデルでは、児童生徒の課題を生物学的観点、心理学的観点、社会的観点の3つの観点から検討します。

例えば、不登校の児童生徒の場合、「発達特性や病気等の生物学的観点」、「認知、感情、信念、ストレス、パーソナリティ等の心理学的観点」、そして「家庭や学校の環境や人間関係等の社会的観点」から実態を把握すると同時に、児童生徒自身の良さ、長所、可能性等の自助資源と、課題解決に役立つ人や機関・団体等の支援資源を探ります。

3つの観点には重なる部分があり、多様さと複雑さを理解することが大切です。今回の模擬事例では、アセスメントの枠組みとしてBPSモデルを活用しています。

この授業のねらい

- 課題早期発見層の生徒について、校内連携型支援チームにおける連携プロセスについて理解する。
- 模擬事例を通して、校内連携支援チームによるケース会議の進め方(子どもの理解を深めることを目的とした会議)の一例を学ぶ

それでは、改めて、本講座のねらいについて説明します。この実践編のねらいは2つあります。

1つ目は、課題早期発見層の生徒について、校内連携型支援チームにおける連携プロセスを理解すること。

2つ目は、模擬事例を通して、校内連携支援チームによるケース会議の進め方の一例を学ぶことです。

これで実践編その①概要編は終わりです

- ・ 実践編その②模擬事例編ではワークシートを使用しますので、お手元にご準備ください。

これで（実践編その①）概要編の講義を終わります。
次の（実践編その②）模擬事例編ではワークシートを使用しますので、
お手元にご準備ください。
準備ができましたら次の「模擬事例編」の動画をご視聴ください。